

---

令和5年度 第2回（午後）（グローバル・2科目共通）

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和5年2月2日 施行

---

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は18ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

一

次の――線部のカタカナを漢字に直して書きなさい。

- ① 両国が貿易協定にチヨウインした。
- ② 糸をオって布製品をつくる。
- ③ 友人の結婚式でシユクジを送る。
- ④ 海外に渡った弟からタヨリがとどいた。
- ⑤ 家と学校を毎日オウフクする。
- ⑥ フナれな仕事で失敗をくりかえした。
- ⑦ 夕暮れの海は心をゆさぶるジヨウケイだった。
- ⑧ 舟から棒を刺して水の深さをハカる。
- ⑨ 古本屋ですでにゼツパンになった本を見つけた。
- ⑩ すべての試験を終えてカイホウ感にひたる。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

① あなたはいつから教育を受けてきたでしょう。幼児教室に通いだした3歳のとき？ それとも、トイレや着替えをしつけてもらうようになった2歳のころでしょうか。

最近の研究では、実はもつと前から、大人が赤ちゃんに向かって発する何気ない働きかけの中に、すでに「教育」が忍び込んでいることがわかってきています。といってもそれは子どもが胎内注1にいるときから胎教注2したり、生まれて間もない子どもに、いろいろ言って聞かせるというのとは違います。そこでも親は確かに何かを「教育」しようという意図を持って働きかけをしています。子どもがそれに応えて学んでいるという確かな証拠注3がありません。② 実験で示されたのは、そうではなく、大人の働きかけに対して6カ月の乳児がきちんと反応して学習しようとしているということでした。

それは日本の若手研究者である千住淳注4がハンガリーの心理学者チブラといっしょに行ったこんな実験です。実験者である大人が赤ちゃんにむかって視線を向けたり、「はあい」と子ども向けの高くかわいらしい声色注5(マザリーズといいます)で声掛けしてからある対象の方向を見ます。すると、そうしないで赤ちゃんの目の前で同じようにある対象を見たときよりも、視線追従、つまり相手の視線を追っかけて、その対象をいっしょに見ようとする頻度注6が高くなるのです。

この視線追従はヒトが他人と関心を共有し、気持ちや情報を伝え合ううえで重要な行動で、ヒトの場合、③ だいたい9カ月ぐらいからそれができるようになることが知られています。そのころの赤ちゃんは視線追従だけでなく、ほしいものや興味深いものを指さして、お母さんなどにそのことを伝えようしたり、他人の指さしする先を見ようとするという「共同注意」が始まります。それまでお腹注7がすいたら泣く、うんちがしたくなくても泣く、ガラガラを振れば笑う、見つめたり微笑みかければ笑うという単純な反応しか示さなかった赤ちゃんが、他人との意思疎通注8を開始する能力を発揮する極めて重要な行動の出現ということで、これを「9カ月革命」と呼ぶくらいです。それまで「自分とモノ」、④ 「自分と他人」という2項関係だったものが、「自分と他人とモノ」との3項関係を取ることができるようになった証注9です。

④ 視線追従や共同注意ができるということ、つまり3項関係が成立することが、どれほど重要かを理解するために、同じことをイヌやネコができると想像してみてください。あなたが何か面白そうなものを見つけて、それを見つめていると、あなたの飼っているイヌやネコもいつしよにそっちの方を向くとしたら？ それもただ同じ方向を見て、「なるほど、これのことだったのね」と確認するかのようには、再びあなたの顔を見つめ直したとしたら。これをおかしいと思うか怖いと思うかは別として、ネコやイヌたちに対し、あなたの「心」が理解できていると感じるでしょう。そして意思疎通ができると信じられるに違いありません。しかしながら、どんなに賢いイヌやネコでも、こういうことはできません。チンパンジーですら、それはほとんどできていないようです。ところがヒトという動物は、あたりまえのように、そうすることをわざわざ親から訓練されることもなく、おのずとできるようになっているのです。

共同注意は意思疎通の基本であり、それはとりもなおさず教育の基本です。なぜなら、教育が成り立つためには、先生が教えたいと思つて注意を向けた黒板の板書や教科書の内容など、「教材」の内容に、生徒も注意を向ける、先生―教材―生徒の間の3項関係が共同注意によつて成り立つ必要があるからです。

それでは逆にこの3項関係が成り立てば教育は成り立つのでしょうか。とすれば、9カ月革命のころからそれは可能になるはずで、【A】そんな小さいころに、何か言つて聞かせようとしてうまくいくような気はしないでしよう。やはり言葉がわかる2歳くらいにならないと、大人は子どもにもものを教えることはできないのでしようか。

言つて聞かせること、ことばで伝えることが理解できるようになることを教育というなら、教育が始まるのは子どもがことばを使い始める2歳くらいということになります。しかし実は、言葉を話し始める前から、子どもは「教育」によつて学んでいる、【B】それは大人の側では「教育」などと思つていない何気ない行動から「教育」されていることをチブラとゲルグリーは示しました。

まだ1歳の子どもの目の前に、二つの、どちらも子どもにとって魅力的な物を、一つは左側、もう一つは右側に置きます。一人目の実験者がその品物の反対側から子どものほうを向いて、はじめに子どもと目と目を合わせてから、そのうちの一方

に視線を向けます。すると子どもは先ほどの視線追従をしてそちらのほうを向きます。次に一人目の実験者はそのままその場を去り、しばらくして二人目の実験者がやってきて、その二つの物を両方見比べ、どっちをとろうか迷ったふりをします。すると子どもは、第一の実験者が視線を向けたほうを指差して、こっちを選びなよというしぐさをします。

かわいらしいしぐさではありますが、そんなのはあたりまえだろうとも思うかもしれませんね。ここは準備段階です。次に子どもにとって、好き嫌いにちよつと違いのあるものを左右に置きます。【C】ある子どもは赤い物のほうが青い物よりも好きだとしたら、同じ形をした赤い物と青い物を置くわけです。そして第一の実験者は、やはりはじめに子どもと目を合わせてから、子どもがあまり好きでないほうの色、つまりこの場合は青いほうを見ます。すると子どもはさつきと同じように青いほうに視線を追従します。さて、やはり第一の実験者は立ち去り、第二の実験者が来て、先と同じようにどちらをとるか迷ったふりをしたとき、子どもはどちらを指差すでしょうか。自分の好きな赤いほうでしょうか、それとも第一の実験者が見つめた青いほうでしょうか。

子どもは、自分の好きな赤いほうではなく、第一の実験者が見て視線追従した青いほうをさす割合のほうが多いのです。これが先に示したように、⑤はじめに第一実験者が、子どもと目を合わせることなく、一人で勝手に子どもの好きでないほうを見て立ち去るようすを見せた場合は、第二の実験者が来たときに子どもが指差すのは、圧倒的に子ども自身が好きな色でした。

これはおそらく、子どもが第一実験者が視線を使ってわざわざ自分に注意を促して見させたもののほうが「選ばれるべきもの」、個人的好みではなく「客観的に価値のあるもの」とみなして、それを第三者に教えようとしているのだと考えられます。自分自身の好みを相手に伝えるのではなく、自分の好みとは別次元の客観的・普遍的価値基準を、この年齢の子どもは大人のふるまいから察し、そしてそれを他者に伝えようとしているのです。⑥このような大人と子どもの自然なやり取りの中で生じている「教育」の機能を、チブラとゲルグリーは「ナチュラル・ペダゴジー」つまり「自然的教育」と名づけました。

(安藤寿康『なぜヒトは学ぶのか 教育を生物学的に考える』より)

(注1) 胎内たいない…母親の腹の中。

(注2) 胎教たいきょう…腹の中にいる子どもに音楽を聞かせたり本を読み聞かせたりすること。

(注3) 声色こゑいろ…声の調子。声の音色。

(注4) 2項関係…二つのことからの関係。

(注5) 普遍的…広く行きわたるさま。きわめて多くの物事にあてはまるさま。

問1 —— 線部①「あなたはいつから教育を受けてきたでしょう」とありますが、筆者はこの問いに対する答えをどのよう

に考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. トイレや着替きがえをしつけてもらうようになったところ。

イ. 他人の指さしする先を見ようとすることになったところ。

ウ. 微笑ほほえみかけられれば笑う反応はんのうを示すようになったところ。

エ. 胎内たいないでいろいろ言っけて聞かされるようになったところ。

問2 —— 線部②「実験で示されたのは」とありますが、「実験で示された」こととして正しいものを次の中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア. 乳児ちどりが、他人が指さす方向をいっしょに見ようとすること。

イ. 乳児ちどりが、自分の欲求を大人に対して指さしで伝えようとすること。

ウ. 乳児ちどりが、自分に向けられた視線や声かけに対して声で返答すること。

エ. 乳児ちどりが、呼びかけた大人の視線の先にある対象に目を向けること。

問3 — 線部③「だいたい9カ月ぐらい」とありますが、これ以降の赤ちゃんは自分とそれ以外をどのような関係としてとらえることができるようになるかと筆者は述べていますか。本文から十五字以上二十五字以内でぬき出して答えなさい。句読点などの記号も字数にふくみます。

問4 — 線部④「視線追従や共同注意ができるということ、つまり3項関係が成立することが、どれほど重要か」とありますが、「共同注意」が「重要」なのはなぜですか。十五字以上二十字以内で説明しなさい。句読点などの記号も字数にふくみます。

問5 本文の空らん【A】く【C】に入る言葉として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア．さて    イ．しかし    ウ．たとえば    エ．しかも

問6 —— 線部⑤ 「はじめに第一実験者が、子どもと目を合わせることなく」とありますが、「第一実験者」がこのように

したのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 視線追従の有無が子どもの行動にどのような影響を与えるか確かめ、子どもの教わって学ぶ能力と教える能力を明らかにするため。

イ. 第一の実験者による共同注意を行うことで、子どもの「選ばれるべきもの」の判断に個人的好みがどのように影響するかを確かめるため。

ウ. 大人が自分の好みを示すことによって子どもの好き嫌いにどのような影響が生じるかを調査し、具体的に「自然の教育」の存在を証明するため。

エ. 第三者が子どもと視線を合わせたときと合わせなかったときを比較し、子どもが他者をどのような過程を通して信頼するようになるかを検証するため。

問7 —— 線部⑥ 「このような大人と子どもの自然なやり取りの中で生じている『教育』の機能を、チブラとゲルゲリーは

『ナチュラル・ペダゴジー』つまり『自然の教育』と名づけました」とありますが、チブラとゲルゲリーが行った「ナチュラル・ペダゴジー」に関する実験からわかったこととして適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア. 「教育」が始まるのは子どもがことばを理解できるようになってからである。

イ. 子どもは大人が「教育」を意識しないうちから「教育」されている。

ウ. 子どもは大人の何気ない行動から客観的に価値あるものを学んでいる。

エ. 「教育」に大切なのは子どもの興味をうまく引き出すことである。

オ. 好き嫌いは大人に教わる以前からもともと子どもにも備わっている。



三 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

旅行会社の支店長をしているお父さんは、土日が休日ではないし、家に帰る時間がとても不規則だ。海外旅行のツアーでトラブルが起きたり天候の影響で交通機関がストップしたりすると、帰ってこられないこともある。

だからうちでは、いつもお父さんの帰りを待たずに夕食をすませることになっている。

お兄ちゃんの塾がある火曜日と木曜日は、お母さんとふたりで、塾がない日は三人で。学校から直接塾に行くお兄ちゃん  
は、九時半に帰ってくるまでご飯を食べられないので、お母さんが作ったおにぎりを塾に持参して夕方食べているらしい。

その日は木曜日だったから、お母さんとわたしだけで夕ご飯を食べて、お風呂に入った。

お風呂から上がって、電気をつけないまままで暗い廊下を歩いていたら、お母さんの小さな声が聞こえてきた。 くぐもつ  
たような声の調子から、またおばあちゃんと電話をしているのだとすぐにわかった。

リビングの入り口に近づいたとき、「睦子」という声が耳に入って、思わず足が止まった。

「ううん、心配しすぎなんかじゃないわよ。今はいろんなところで子どもの問題が起こってるのを、ママだってニュースで見たりするでしょう？ 睦子は貴良とちがって、なにを考えているかわかりにくい子なんだから……」

① これ以上聞かないほうがいい、と心の中で声がした。お母さんが電話で話すことなんて、どうせ楽しい話であるはずがない。それなのに、わたしはその場に立ったまま、息をひそめて耳をすました。

「こんなことは言いたくないけど、学校にだっていい友達ばかりがいるわけじゃないと思うの。睦子の成績じゃあ中学も、貴良が通っているような学校には入れないだろうし。悪い子とつき合ったりいじめられたりするくらいなら、ひとりでお兄さんの家に行つてくれるほうがまだましかなって……。もちろん、本当はまっすぐ家に帰つてこさせたいのよ。でも、あの子は言うことを聞かないから……」

ドアの隙間からのびた光が、わたしの足の甲を横切っていた。

その光に目を落としながら、<sup>②</sup> ゆっくりと息を吸って、吐きだした。そうしなければ、その場で大きな声を出してしまいうような気がしたからだ。

いやな顔をしながらも、わたしがハルおじさんの家に行くことを許しているのには、そんな理由があったのか。わたしには「信じてる」なんて言っていたくせに。そう思うと、胸の奥がむかむかしてきた。

「ママにはわからないのよ。だってわたしが睦子くらいるとき、ママはお兄さんの病気のことで頭がいっぱいで、わたしなんてちつとも目に入っていないなかったじゃない。パパはいつもやさしかったけど、参観日ではやっぱり目立っていたし、ふたりだけで過ごす日が続くのは本当にさびしかったんだから。それでもわたしは、ママに心配をかけちゃいけないからって、いつもいつも、必死でがんばってたの。そんな気持ちに、ママはまったく気づいていなかったでしょう？ わたしはママとはちがう、ちゃんとしたお母さんでいたい。いい母親でいたいよ」

お母さんの口調は、だんだん子どものようになっていく。

こんなときのお母さんは、自分がお兄ちゃんやわたしのお母さんであるということをすっかり忘れて、ただおばあちゃんの子どもに戻ってしまっているようだ。

足音を立てずに階段を上り、部屋に入った。しめった髪がすっかり冷えて、細い金属みたいになっていた。

土曜日、お昼ご飯をすませてから、キッチンで洗い物をしていたお母さんに「ハルおじさんの家に行ってくるね」と声をかけた。

お母さんは水を止めて「また行くの？」と<sup>b</sup>眉を寄せたけれど、わたしは「ちゃんと早く帰るから」と言って、玄関に向かった。

さつさと家を出てしまおうとスニーカーをはいていたら、階段からトトン、トトンと変なリズムの足音がして、お兄ちゃんが下りてきた。

そして下から三段目でびたりと立ち止まると、

「睦子、またハルおじさんちに行くの？」

と聞いてきた。

「うん」

わたしの返事を聞くと、お兄ちゃんは小さな声で「ふうん」と言っつて、そのまま階段にストンと腰かけた。それから、

「睦子って、いつもなにやってんの？ ハルおじさんちで」

と言った。

「なにつて、本を読んだり宿題したり、いろんなこと」

いろんなことの中には、昼寝をしたり、コンビニで買って行つたお菓子を食べたりも入っている。とはいえ、たいていは本を読んでいるのだけれど。

「あのみ」

「ん？」

「前から思つてたんだけど、なんで睦子はハルおじさんの家に行くようになったわけ？ 睦子だけ」

お兄ちゃんはわたしのことをまっすぐに見ていたけれど、わたしは目をそらして答えなかつた。

ハルおじさんとお母さんとはふたりきりの兄妹だったし、ぐうぜん近くに住むことになったものの、親しく行き来はしていなかつた。

まだハルおじさんが生きていた頃、「うちの家は、どうしてハルおじさんが設計しなかつたの？」と、お母さんに聞いたことがある。

お母さんは、「しかたなかつたのよ、お父さんが仕事でお世話になつてる住宅メーカーの人にたのまなくちやいけなかつたから」と、ちよつと困つたように笑いながら言つた。

そしてそのあとで、「それにハルおじさんとは、正直なところあまり兄妹つていう感じがしないのよね。病気のこともあつて、いっしょに過ごした時間がとても短かつたから」と、つけ加えた。

そんなハルおじさんとわたしが仲良くしていたことを、お兄ちゃんが不思議に思うのは当たり前なのかもしれない。ただ、ハルおじさんとわたしのことを説明するのはなんだか難しい気がしたし、長い時間がかかりそうだった。なによ<sup>③</sup>り お兄ちゃんには、わたしの気持ちなんてわからないだろう。

家を出ようとドアを開けたとき、

「いいなあ、睦子はのんきで」

という言葉が、小石のように背中中に飛んできた。

「え？」

思わずふり向いたけれど、お兄ちゃんはまだわたしのことなんて見ていなくて、座<sup>すわ</sup>ったままで前かがみになり、階段の下に目を落としていた。

そして、

「オレも、ハルおじさんの家に行ってみようかな」

と、小さな声で言った。

わたしは外に出ると、玄関ドアをパタンと閉めて、その言葉を家の中に閉じこめた。

学校やテニス部や塾や家、小さな頃から人気者のお兄ちゃんの居場所はどこにでもある。けどわたしには、ハルおじさんの家しかないのだ。「行ってみようかな」なんて、気軽に言っただけじゃなかった。

コンビニの前を通り過ぎ、小さな児童公園の横を曲がって坂を上った。そこは、近所の人たちから「子落<sup>こお</sup>としの坂」と呼ばれている坂道だ。

傾斜<sup>けいしゃ</sup>が急なうえに曲がりくねっているため、抱<sup>だ</sup>いている子どもを落したり、背負<sup>せお</sup>っている子どもがずり落ちたりする、という意味があるらしい。はじめて聞いたときには、なんて不気味な名前なんだろうとこわくなったけれど、実際は陽<sup>ひ</sup>の当たる、とても明るい坂道だ。

坂を上りきって住宅街を歩くと、道端<sup>みちばた</sup>に積もった枯<sup>か</sup>れ葉<sup>は</sup>が、足の下でかたくかわいた音を立てた。ハルおじさんの家の玄

関ポーチにも、たくさん吹き寄せられていた。

ハルおじさんの家は、とても静かだ。

つけっぱなしのテレビの音や、<sup>c</sup>投げやりな感じの足音がしない。空気を濁らせてしまうようなため息も聞こえないし、なによりお母さんから発せられる、あのピリピリを感じることはない。

本当は、ハルおじさんが生きてたときみたいに窓をぜんぶ開け放ち、きれいな風を部屋中に走らせたのだけれど、そんなことをしてはいけないと言われているから我慢した。わたしが開けるのを許されているのは、人が通りぬけられないくらい細かいキツチンの小窓だけだ。

しかたなく、閉めきつたままの大きなガラス戸の近くに立って外を見た。

ハルおじさんがこの家を建てるまで、ここにはおばあちゃんの実家があったのだとお母さんが言っていた。その家で一人暮らしをしていた、おばあちゃんのお母さん、つまりわたしのひいおばあちゃんが亡くなったのをきっかけに、ハルおじさんはこの土地にやってきた。近くに大きな病院があることも、体の弱かったハルおじさんには都合がよかったらしい。

そして、古かった家を設計事務所兼自宅に建て直したのだけれど、庭の木々はできるだけそのままにしておいたのだという。

四枚のガラス戸から見える裏庭の、一本の大きなイチョウの木に秋の陽が当たって、庭全体を金色に輝かせていた。その中で、足元にある六本の丸いホウキ草だけが深い赤色に染まっている。

思わず

「わあ、きれい」

とつぶやくと、

「うん、きれいだね」

と、ハルおじさんの声がした。

ふり返ってみたけれど、もちろんだれもいなかった。

声は、キッチンの奥から聞こえたような気がしたし、テーブルがある場所の天井のほうから聞こえたような気もした。この家のどこかにはまだハルおじさんが住んでいて、ときどきこうして、ふっとわたしのそばに現れる。

わたしがはじめてこの家にひとりで来たのは、幼稚園の年長組のときだった。

その日は朝からお母さんの機嫌がとて悪くて、勉強机について肩を縮めているお兄ちゃんのそばに立ち、「ノートは丁寧に書きなさいって言ってるでしょう？ それなのに、どうしてちゃんとできないの、どうして？」とくり返していた。

「どうして、どうして」は、怒るときのお母さんの口ぐせだ。どうして部屋を片づけけないの、どうしてご飯をこぼすの、どうして言うことを聞かないの。

そんなふうには怒られれば怒られるほど、どうしてなのかわからなくなる。なにか答えるとますます怒られそうな気がするし、だまっていればだまっていたで、「どうしてなにも言わないの」と言われつづける。

わたしが怒られることもあったけれど、悪いことなどなにもしないはずのお兄ちゃんも怒られることも多かった。

そんなとき、わたしは自分が怒られているときと同じような気持ちになった。そして、お兄ちゃんがかわいそうになると同時に、お母さんの目はいつもお兄ちゃんばかり見ている気がして、さびしくなった。

いつもは息をひそめてじっとしているのだけれど、その日はなぜだかちがっていた。前の日に買ってもらったばかりの、ひまわりみたいな黄色いワンピースを着ていたからかもしれない。お母さんがそんな明るい色の服を買ってくれるなんてとてもめずらしいことだったから、外を出歩きたくてしかたなかったのだ。

わたしはそつと裏口に走り、小さな花飾りのついたサンダルをはいて外に出た。息がつまりそうだった家の中とちがい、外は広くて、まぶしい夏の光でいっぱいだった。

コンピニの前を通り過ぎて児童公園の横を曲がり、子落としの坂を上った。

しつこく怒っているお母さんからはなれたいという気持ちはたしかにあったけれど、<sup>④</sup>お母さんに追いかけてきてほしいという気持ちもあったような気がする。わたしは息を切らしながら、サンダルの足を前へ前へと動かしつつづけた。

だけど、坂を上りきったところにある白い建物の前で、ガラスのドアの隙間からもれてくるシャンプーの香りとエアコンの冷たい風を一瞬だけ感じたときに、ハッとした。そこが見知らぬ散髪屋さんの前で、今までひとりでは来たことがないほど遠いところだと気づいたのだ。

急に、心細くてたまらなくなつた。のどがひどくかわいて、頭がぼうつとしていった。

散髪屋さんの入り口に置かれた、くるくる回るサインポールがゆがんで見えて、わたしはその場にしゃがみこんでしまった。すると今度は、アスファルトからはね返ってくる熱で、蒸し焼きにされているような気持ちになった。

すぐく暑い日に、カラカラにかわいて死んでいるミミズが道路に転がっているのを見たことがある。自分もあんなふうにからびてしまうのかもしれないと、本気で思った。

お母さんの手が届かない場所にいることが、こわくてこわくてしかたなかった。

そしてとうとう、声も出せないまま涙を流して、その場にうずくまってしまったのだ。それがほんの一、二分だったのか、もっと長い時間だったのかはわからない。

ふいに頭の上から「むっちゃん？」という声が落ちてきた。

驚いて顔を上げると、「やっぱり、むっちゃんか」と、ハルおじさんがわたしを見下ろして立っていた。

大きなハルおじさんの体の向こうに、真っ青な夏空が広がっていた。

あとから聞いた話だけれど、そのときのハルおじさんは、仕事で建築現場まで出かけた帰りだったらしい。

助かった、と思った。ひからびたミミズみたいになりそうだったわたしを助けてくれたのは、お母さんでもお父さんでもお兄ちゃんでもなくて、年に一、二度会っていただけのハルおじさんだったのだ。

それから、ハルおじさんに負ぶわれたのか手を引かれたのかは、覚えていない。記憶の中のわたしは、もうハルおじさんの家にいた。

その頃のハルおじさんの家は、今よりずっと散らかっていた。

部屋のあちこちに本やノートが積み重ねられ、椅子の背もたれには服や帽子が何層にもなっかけてかけられていた。仕事用ら

しい黒くて大きなカバンが床かに置かれていて、テーブルの上には、文房具ぶんぼうぐや作りかけの住宅模型が出しっぱなしだった。そして、そのごちゃごちゃとした空間は、いつもきちんと片づけられているわたしの家なんかより、ずっと居心地いこころがよかった。

なにより目を引いたのは、棚たなにずらりと並べられた住宅模型だ。

それはミニチュアの家とはいえ、屋根瓦やねがわらやレンガの壁かべ、部屋の照明までとても細かく作りこまれていて、よく見ると、庭の木に小鳥がとまっているものまであった。

ながめていたら、笑い声やおしゃべりする声、足音や赤ちゃんの泣き声までが聞こえてきた。カーテンが風にゆれ、キッチンからはお料理のおいがただよってくる。

「むっちゃん」と呼ばれてハツとした。「のどがかわいただろう？」と言うハルおじさんは、背の高いコップいっぱいカルピスを作ってくれていた。それを見て、わたしは急にのどがかわいていたのを思いだした。

作りかけの住宅模型が置かれたテーブルにつき、冷たいコップを両手で持った。「ごめんね、うちにはストローがなくて」とハルおじさんが言うのを聞きながら、そのままコップをかたむけた。

ハルおじさんはわたしに、<sup>⑤</sup> どうしてあんなところにしやがんでいたのか、どうして家を出てきたのかとは聞かなかった。

ただ、「お母さんに、あとでおじさんが送っていくって電話をしたのに、今から迎えむかに来るって言われちゃったよ。お母さん、むっちゃんがいつの間に出ていったのって驚いて、ジャングルにいる鳥みたいに、ヒヤーツて変な声でさげんで」と言い、鼻から大きな息を吐くようにフッフと笑った。

それからハルおじさんは、住宅模型の続きを作りはじめた。開け放した窓からは、すずしい風が入ってきた。

わたしはカルピスを飲みながら、お母さんが迎えに来るまでの少しのあいだ、ハルおじさんの大きな手が作りだす小さな家を見つと見ていた。

(なかやませいこ  
中山聖子『雷のあとに』より)



問1 ─── 線部の言葉 a 「くぐもった」・ b 「眉を寄せた」・ c 「投げやりな」の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 「くぐもった」

ア. こもってはつきりしない      イ. 不安を感じている

ウ. 高く耳にひびく      エ. 怒りを抑えきれない

b 「眉を寄せた」

ア. 怒りから威圧するような表情をつくった      イ. 驚いて意外そうな顔を見せた

ウ. 悲しくて泣きそうな表情をした      エ. 不快感からいやそうな顔をした

c 「投げやりな」

ア. 自分は悪くないという無責任な      イ. どうでもいいといういい加減な

ウ. 他人を不愉快にさせるほどに勝手な      エ. 悲しみをこらえきれないというつらそうな

問2 ─── 線部① 「これ以上聞かないほうがいい、と心の中で声がした」とありますが、このときの「わたし」の気持ちの

説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 母親が自分のことをどのように思っているのか聞きたくて好奇心を抱いている。

イ. 会話の内容を知ることによって自分が傷つくことを避けたいと思っている。

ウ. 立ち聞きしたことを母親に後で知られてしかられるかもしれないと恐れている。

エ. 電話の会話を盗み聞きするのはマナー違反であると自分に言い聞かせている。

問3 ── 線部② 「ゆっくりと息を吸って、吐きだした」とありますが、「わたし」がそうしたのはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 自分に対する母親の望みを理解し、受け入れようとしたから。

イ. 自分を裏切っていた母親に対してひどく失望したから。

ウ. 自分への母親の本心を聞き、悲しみに打ちひしがれたから。

エ. 母親への不快感や怒りが爆発するのを抑えようとしたから。

問4 ── 線部③ 「お兄ちゃんには、わたしの気持ちなんてわからないだろう」とありますが、「わたし」がこのように考えたのはなぜですか。四十字以上六十字以内で説明しなさい。句読点などの記号も字数にふくみます。

問5 ── 線部④ 「お母さんに追いかけてきてほしいという気持ち」とありますが、「わたし」のこの気持ちと同じ気持ちがあると思われる部分をここより前から三十字以上四十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。句読点などの記号も字数にふくみます。

問6 ——— 線部⑤ 「どうしてあんなところにしゃがんでいたのか、どうして家を出てきたのかとは聞かなかった」とありますが、この表現にはどのような効果がありますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 睦子の母親とハルおじさんが対照的な人物であることを明らかにする効果。

イ. 睦子が家族や親類から気にかげられていないことを強調する効果。

ウ. ハルおじさんがおおざっぱな性格であることをはっきりと伝える効果。

エ. ハルおじさんと睦子が打ち解けていないことをそれとなく示す効果。

問7 次のア～オは、この小説を読んで感想を話し合ったときの会話を、発言の順序を無視してメモしたものです。この中に内容を誤って理解している発言が一つあります。それを選び、記号で答えなさい。

ア. 「そう考えると、自分の望みばかりを押し付けて子どもに気付いてあげられていないお母さんも、睦子の事情に思いついたらないお兄さんも、その意味では三人とも同じということになるね。」

イ. 「そうか、お母さんが睦子をハルおじさんの家に行かせるのは、なかなか自分の思い通りにならない睦子を、心の中では遠ざけたいと思っているからなんだ。」

ウ. 「この話の中で、睦子は睦子で苦しい思いをしているけれど、お兄さんもお兄さんで苦しんでいる気がする。お兄さんに対するお母さんの気持ちが重圧になっているのではないのかな。」

エ. 「なるほど、そうすると『オレも、ハルおじさんの家に行ってみようかな』という言葉は、現在の状況から一時的にでも逃げたい気持ちから出た、切実なものとしてとらえることができるね。」

オ. 「お兄さんにもお兄さんなりに苦しい思いがあるけれど、睦子は自分の苦しさに心が占められてそれに気付いていないという点が、この話の複雑なところだと思う。」

国語解答用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

(注意) ※のらんには何も書かないこと

一

⑨	⑤	①
⑩	⑥	②
	れ	つ
	⑦	③
	⑧	④
	る	り

二

問 1

問 2

問 3

15

問 4

15

問 5

A

B

C

問 6

問 7

三

問 1

a

b

c

問 2

問 3

問 4

40

60

問 5

5

問 6

問 7

※

※

※

※

※

※

※